

箱火ばちの おいさん

宮口しづえ
え・高橋薫



箱火ばちの おいさん

宮口しづえ



筑摩書房

913.6／箱火ばちのおじいさん
170 ページ・22 cm・A 5 変型判

作者について

1907年、長野県小諸^{こもろ}で生まれた。松本女子師範学校^{しはん}を卒業。小学校の教員、島崎藤村全集（新潮社版）の編集^{へんしゅん}に従事。その後、童話を書きはじめた。作品に『ミノスケのスキー帽』（第7回日本児童文学賞新人賞）、『ゲンと不動明王』（第2回末明文学奨励賞）ほか三部作、『オンタケの子ら』『たろ なにみてるの』がある。

一九七四年五月十五日 第一刷発行

著 者 © 宮 口 し づ え

発 行 者 井 上 達 三

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房^{ちくましょぼう}

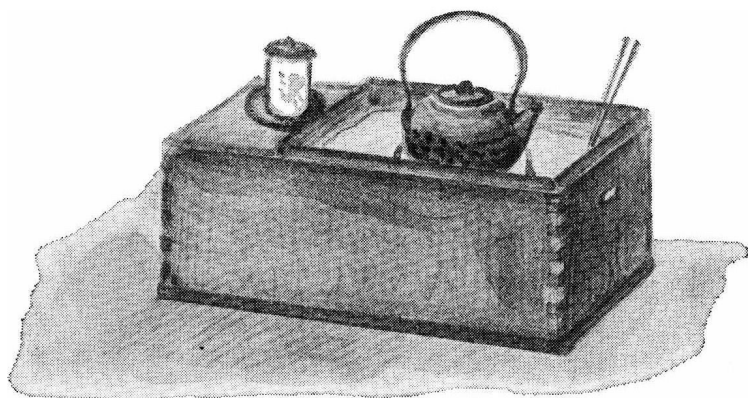
東京都千代田区神田小川町二一八
電話 東京 (03) 二九一七六五一
振替口座 東京 四一二二三

厚德社印刷・和田製本

8093—88010—4604

もくじ

箱火 ^{はこ} ばちの前のおじいさん	5
こわい地主 ^{じぬし} さま	11
米の音	18
おばあさんの大病	24
えんとつの高さくらべ	30
朝ごはんのさいそく	37
たったひとりの親友	44
おじいさんが子どものころ	46
おじいさんの晴 ^は れ姿 ^{すがた}	58
心理 ^{しんり} 学 ^{がく} と焼 ^や けこげ	65
七草 ^{ななくさ} がゆ	72
「なるかならぬか」	79
キツネにばかされる	86



たくあん作り 93

おじいさんの買い物 99

お百姓とタネ 106

カボチャにばけたスイカのタネ

112

小さなおまつり 119

富山のくすり売り 127

サンマのはらしばり 138

おじいさんの夢 146

むかしの人の読書 153

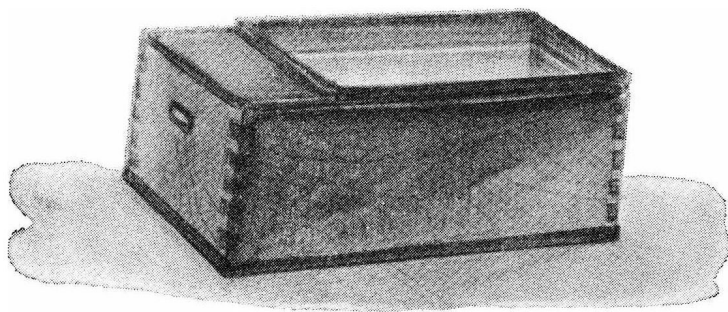
タローのお見舞い 159

あとがき 167

さそうてい
えい

高橋
たかし

薫
かおる



箱火ばちのおじいさん

箱火はこばちの前のおじいさん

「おじいちゃん、キツネにばかされた話ね、あれ、ほんとの話かね？」

「おれが、うそをはなすと思うかよ」

「おじいちゃんのような人がキツネにばかされるなんて、キツネのほうがおじいちゃんを見たら、おっかなくって、にげだしてしまうと思うけれど……」

「おれはそんなにおっかないかよ」

「おっかないねえ、箱火はこばちの前にきちんとすわって、たばこをすっていると、ころを見ていると、いつでもしかられそうな気がするねえ」

「それは、おまえがへぼいからさ」

八十八歳さいのおじいさんと、五十五歳さいのわたしです。いつでもしかられてばかりいました。

木曾路きそじも南のはずれ、馬籠まごめの家の裏うらに、お宮の大きな森をしょった古い大きな家の中に、たったふたりだけで暮くらしていました。

このときからあと五年、おじいちゃんは、だんだんからだがおとろえてきて、九十三歳までながいきをして、死んでしまいました。

今、ひろい台所だいどころに、おじいちゃんのすわっていた箱火はこばちが、そのまんまに、ぽつんと置いてあります。

毎朝、台所の板いたの間まをぞうきんがけをするときに、その箱火はこばちも、ていねいにふいています。

そのたびにわたしは、そこにおじいちゃんがすわっているような気がして、「おじいちゃん、そこをふくで、ちょっとよけてください」



「今はよけれん、あとでふけ」

知らん顔して、いばっている人でした。

この世の中をいばりとおして、おばあさんの死んだときにも、むすこの死んだときにも、つぎつぎに不幸なことがあっても、涙なみだひとつ見せたことも、ぐちをひとつ言ったこともなく、村の神社じんじやの神主かんぬしとして、いつでも神様の前にすわっていたようなおじいちゃんを、このごろになって、夢ゆめにみたり、なつかしく思い出すのです。

そうです。わたしもだんだん年をとってきたせいかしらんと思いますが、そればかりでなくて、古い家にひとりのこされて、相談相手の子どもたちも旅たびで暮くらしていますので、つい、心の中のおじいちゃんに話しかけてしまうのです。

箱火はこばちの前はこから消きえて、わたしの心の中にのこっているおじいちゃんは、ずいぶんいろいろなことを教えていってくれました。

「おじいちゃん、けさ、井戸端の石垣のそばから、毎年でてくるガマが出てきましたよ」

「ほーお、ヒキタが顔を出したかよ、そろそろ梅雨にはいるで、みそのつき直しをしろよ」

また、

「おじいちゃん、今年はずい忘れてしまつて種子イモの注文をしなかったが、家のおイモでもだいじょうぶかいねえ」

「よく忘れるやつだ。だいじょうぶだとも。毎年種子イモをかうなんて、ぜいたくだ。大きいのは二つにも三つにも切つてうるんだぞ。おれは種子イモなんか買ったことがないぞっ」

まあ、こんなぐあいです。

畑に出て夕方の草刈りをしていますと、ブヨがたくさん出て、顔や目の前にちらちらとしてうるさいときがあります。そんな夕暮れどき、またおじいさん

の声です。

「こんなにブヨが出たで、あしたは雨ふりになるかしれん。西の空の雲行きがはやい、庭にわにほしたものを早くかたつけろよ」

お天気のことまで、世話せわをやかれました。

こんなおじいさんでしたが、今生きていますと、ちょうど百歳さいです。明治、大正、昭和と、長い一生を、何を考え、何をかなしみ、何をよろこびとしてきたかと、わたしの心にのこったおじいちゃんのお話を書いてみます。

まあ、きいてください。

こわい地主さま

戦争前、わたしの家には、たくさんではないが、たんぼがありましたので、人に貸^かしてつくってもらっていました。

おじいさんが地主^{じぬし}で、たんぼを作ってくれるお百姓^{ひやくしやう}さんを小作人^{こさくじん}といっていました。

おじいさんは、小作人たちをすべて呼び^よすてにしていました。

キンサク、ヤタロウ、タツオです。わたしも明治生^よまれでしたが、この呼び^よすてにはおどろきました。

せめて、「さん」とか「さ」をつけて呼^よんでもらいたかったです。

その上まだ、おじいさんのところへ、小作人が用事があったたずねて来ると、箱火はこびばちの前にすわったまま、

「キサマ、なんの用事できたよ」とばかり、キサマ呼よばわりでした。これにもおどろきました。そこで今わたしは、キサマという字を辞書じしょでしらべてみました。むかしは目上の人にたいして使ったようですが、今ではきみとか、おまえということばだそうです。とにかく人を呼よぶのに、聞いたことがないことばでした。

ところがおじいさんが、

「キサマ」

と小作人こさくじんを呼よんだときの、その声といい、その威厳いげんといったらいいのか、いばったようすは、実にたいしたものでした。私は家の人ですのに、ただ驚おどろいて、おろおろしながら、だまって見ていました。

そのキサマと呼よばれた人も、今から言ったら、なんといくじなしかったかと

思います。

たずねて来たからには、なにか用事があつて来たのだでしょうに、おじいさんに、

「キサマ、なんの用事だ……」

と、ひとこと声をかけられると、

「へい、へい、へい」

とばかり、あたまを下げて、実にたわいないものでした。

わたしは、たずねて来たヤタロウさに、応援おうえんしたくって、お茶の用意をしていましたが、その本人が自分の言いたいことも言えないで、

「へい、へい、へい」では、話になりません。実になさけないものでした。

でも、そのキサマも、ヤタロウさたちも、ほっとするような、あったかい思い出もあるのです。

秋じまい。

なんという、なつかしいことばだったでしょう。今でもわたしは、そのことばを聞いたり、ひとりで口にしてみても、子どもの日にあしたの遠足を待つたときのような^{たの}楽しさが、胸^{むね}の中にわき上がります。

百姓^{ひやくしやう}が、いつさいの秋の収穫^{しゆうかく}を終わったおいおいの日のことです。

毎年十一月も二十日すぎでした。その日、わたしの家では、朝からごちそうをこしらえて、夕方から小作^{こさく}人のかたがたをおよびして、年^{ねん}に一度のごちそう

